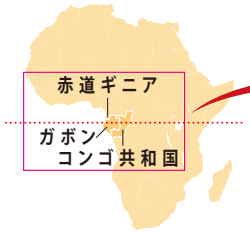
アフリカの森でともに生きる チンパンジー、ゴリラ、そしてヒト



竹ノ下祐二
たけのした ゆうじ / 中部学院大学、AA 研共同研究員

アフリカ中部の熱帯林には、ゴリラとチンパンジーが同じ場所に生息している。ふたつの種は、同じ森にくらし、同じ食物を食べながら、仲良くするでも、ケンカをするでもなく、ただ静かに、ともに生きている。

チンパンジー？ いや、ゴリラだ

ある朝、私はイチジクの樹の下でチンパンジーを待っていた。1995年11月、アフリカ中部、コンゴの森でのことだ。

イチジクはチンパンジーの好物のひとつだ。樹上の実はだいぶん熟してきたようで、数日前から鳥やサルたちが食べに訪れだした。そろそろチンパンジーが来てもおかしくはない。そう思って、近くの村で雇ったふたりのトラッカー（調査助手）に先導してもらい、夜明け前から樹の下で待ちぶせをすることにしたのだ。かれらはバカ・ピグミーと呼ばれる狩猟採集民で、森のことなら何でも知っている。

チンパンジーたちは早起きだ。そんなかれらの先回りをしようと、暗いうちにキャンプを出て、夜明け前に樹の下にたどりついた。すでに鳥たちが樹上でさわがしく果実を食べていたが、チンパンジーはまだ来ていない。少し離れた、樹上をよく見わたせる場所を選んで、じっと座ってかれらを待つことにした。

明るくなると、鳥たちにつづいてホオジロマンガベイ（サルの一種）の群れがあらわれた。熟した果実をみつけたうれしさか、フープ・ゴブルと呼ばれる、遠くまで響く大きな声をあげる。座っている私のすぐ近くを、アカカワイノシシの群れがブヒブヒといいながら通りすぎてゆく。森はずいぶんにぎやかになったが、かんじんのチンパンジーはなかなか姿をみせてくれない。

森がすっかり明るくなった頃だ。スタスタスタ、と湿った落ち葉をふみしめる足音が近づいてきた。足音は樹の下でとまり、すこしの間をおいて、キャッキャッキャッとかんだかい声がした。チンパンジーにちがいない。息をこらして双眼鏡をかまえ、かれらが樹にのぼるのを待つ。

幹をよじのぼる黒い影が目に入った瞬間、トラッカーのひとりが小さく言った。「バボボ（ゴリラだ）」。やってきたのはゴリラの群れだったのだ。5頭のゴリラは、樹にのぼって30分ばかりのんびりとイチジクを食べると、森の奥へ去っていった。結局その日チンパンジーはあらわれず、待ちぶせは空振りに終わってしまった。

アフリカ熱帯林に共存するゴリラとチンパンジー

意外に知られていないが、ゴリラとチンパンジーはアフリカの熱帯の森に同所的に生息している。分布図を見るとわかるように、ふたつの種の分布域は大きく重なっている。じっさい、ゴリラのいないところでくらすチンパンジーや、チンパンジーのいないところにくらすゴリラは、かれらの中では少数派である。だったら、ゴリラをぬきにチンパンジーは語れないし、逆もまたしかりだ。そう考えて、私は、20年来、コンゴ、ガボンなどアフリカ中部の国ぐにで、ゴリラとチンパンジーの野外研究にかかわってきた。

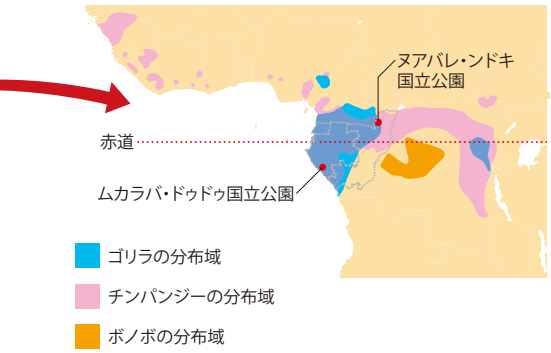
同所的に生息するゴリラとチンパンジーの研究の歴史は、1960年代にさかのぼる。ジョーンズとサパタピというふたりの研究者が、赤道ギニアで野外研究を行なった。かれらは、ゴリラが人里に近く、かれらの好物

コンゴ、ヌアバレ・ンドキ国立公園のチンパンジー。過去に人間との接触が少なかったせいか、あまり人を恐れなかった。

熱帯林の中は湿度が高く、日差しも少ない。

ガボン、ムカラバ・ドゥドゥ国立公園のゴリラ。アフリカ中部の熱帯林のゴリラは樹上性が強く、高い樹でも平気でのぼる。

ゴリラの父子。手前にいるオスのコドモが、後ろにいる父親のまねをして背中を反らせ、観察している私たちに威張ってみせている。



現在、地元の人がエコツアーのガイドになるための研修プログラムを実施している。写真は、JICA（国際協力機構）の視察団に森を案内しているところ。

ブドウの仲間、シッスス・ディンクラゲイ。チンパンジーとゴリラの大好物だが、ヒトが食べると口がしびれるほど痛くなる。

近くの村の子どもと私。私の苗字にあやかって「タケ」と名付けられた。

の草が多くしげる人の手の入った森をよく利用するのに対し、チンパンジーは果実のたくさんある深い原生林をよく利用するというように、「すみわけ」をしていると報告した。

ところが、テュティンとフェルナンデス夫妻が1980年代におとなりのガボンで国じゅうのゴリラとチンパンジーの生息調査を行なったところ、ジョーンズとサパタピが言うような「すみわけ」はおきていないことがわかった。むしろ、どちらかがたくさんいるところにはもう一方もたくさんいるというように、ふたつの種の生息密度には相関関係がみられたのだ。

生態学の理論では、似たような生物の共存はむずかしいとされる。食物などが似通っているので、競争が激しくなるからだ。では、進化の系統も近く、身体の大きさもよく似ているゴリラとチンパンジーが、アフリカの森で「ともに生きる」ことができているのはなぜだろうか。

同じところで同じものを食べる

考えられるのは、食べ物の違いだ。似たような生き物が同じところにいると、競争の結果として「すみわけ」がおきることもあるが、食べ物をたがえることによって共存できることもある。「すみわけ」ならぬ「食いわけ」だ。

ところが、かれらの食物を調べてみると、どうも、食物も似ているようなのだ。中部アフリカには、わたしたちの調査する場所のほかにも、調査が行なわれている場所がいくつもあるが、どの森でも、ゴリラとチンパンジーの食物の40～60%は共通している。いろんな森で食べ物を比べてみると、異なる森のゴリラどうし、チンパンジーどうしより、同じ森のゴリラとチンパンジーのほうが似たものを食べている。さらに好物も同じだ。たとえば、冒頭のイチジクがそうだ。

静かな共存

すみわけも食いわけもしないのなら、かれらはどうやって共存しているのだろうか。もしかすると、共存などしておらず、彼らはたがいに相手をおいはらおうとしているのだろうか。ところが、それも違うようだ。

私の大学院の先輩である鈴木滋さん（現・龍谷大学）は、コンゴのヌアバレ・ンドキ国立公園で、ゴリラとチンパンジーが同じ一本のイチジクの樹で果実を食べるのを観察した。鈴木さんによると、ゴリラもチンパンジーも、あきらかにおたがいに気づいていながら、さわぐこともなく、静かにイチジクを食べていたそうだ。

その後、幸運な何人かの研究者たちが、同じような観察をした。チンパンジーがたまに吠えることがあるが、そんな時はゴリラは近くでチンパンジーが食べおわるのを待っているという。

残念ながら私自身はまだゴリラとチンパンジーが一緒にいるところを見たことはない。けれど、ゴリラを観察しているときに近くでチンパンジーの声を聴くことはある。ゴリラたちにも聴こえているはずだが、めだった反応はしない。

ふたつの種は、仲良くするでも、ケンカをするでもなく、静かに、ただ「ともに生きている」。それは、アフリカの森の豊かさがもたらしたものかもしれないし、わたしたちがまだ知らない、かれらだけの「共存のひみつ」があるのかもしれない。

ヒトだけがなかまはずれ

ここで、私たち人間に目をむけてみよう。人間はチンパンジーやゴリラとよく似た生き物だ。遺伝子の約95%は共通だといわれる。人間は、かれらと共存できているのだろうか。

さきほど、チンパンジーが多いところにはゴリラも多いとのべた。ではチンパンジーやゴリラがたくさんいるのはどんなところだろうか。じつは、ゴリラとチンパンジーの多さをいちばんよく説明できるのは、植生などの自然の条件ではなく、「人の活動」なのである。大都市から離れていて、人口が少なく、伐採や狩猟などがあまりさかんでないところほど、かれらはたくさんいる。というより、人の活動がさかんなところにはかれらはいない、というべきかもしれない。

中部アフリカでは、人間活動によってゴリラとチンパンジーのくらしや命がおびやかされる一方、畑あらしなど、かれらが地元の人びとのくらしをおびやかすことも増えている。あきらかに、ヒトとチンパンジー、ゴリラは対立している。アフリカにくらす三種のヒト科霊長類のうち、ヒトだけがなかまはずれだというのは、なんとも残念だ。そこで、現在私は研究のかたわら、地元の人びととゴリラ、チンパンジーが「ともに生きる」ことができるようにするため、エコツーリズムなど、森をこわしたり、森にくらす生きものたちの命をうばうことなく、森林を持続的に利用するための活動をはじめたところである。